専門学校ルネサンス プロ・スペシャリストを育てる52

ビジネスシーンに適した言葉遣いで学生の発信力を強化

仙台大原簿記情報公務員専門学校
〈宮城県仙台市〉

仙台大原簿記情報公務員専門学校は，さまざまな資格取得を目指せるのが魅力の専門学校だ。同校では教員同士が連携し，学生一人一人に合った就職活動支援を行っている。今回はビジネス系学科での就職面接指導と秘書検定の活用についてお話を伺った。

求人情報がそろう就職インフォメーションセンター。面接トレーニングルームは押し戸と引き戸の両方を練習できるのがポイントだ

事務職・ビジネス系学科学科長の久保田佳子先生。「専門学校生は入学からわずか2年で就職することになるため，学校でのバックアップを徹底しています」

教員間で連携し学生の挑戦を支援

仙台大原簿記情報公務員専門学校では、民間企業への就職と税理士・会計士試験や公務員試験に対応した7系統9学科で約700人が学んでいる。資格取得と就職に強く、毎年多くの新社会人を地元に送り出す同校。今回はビジネス系学科での授業を中心に取り組み内容を伺った。

入学後すぐに日商簿記の授業がスタート。1年次は自身で選択した資格の取得を中心としたカリキュラムを組んでおり、並行して、就職活動全体のガイダンスや職種別のセミナーなど就職活動について考える機会を設けている。本格的な就職活動が始まるのは1年生の3月以降だ。

事務職・ビジネス系学科の久保田佳子学科長は就職支援について、「本校はクラス担任制をとっており、担任による面談を通して、学生それぞれが自分の行きたい方向を目指せるよう支援しています」と話す。

同校の特徴の一つは、教員と学生の距離の近さ。担任が学生一人一人を親身にサポートする。

担任の教員がビジネス系の各教員と連携し、複数の視点で学生を見ることも大切にしている。事務や経理といった職種先行で志望先を決めるため、就職活動において目指すことになる業界は銀行や建設会社、総合商社とさまざまだ。教員によって得意な職種や企業が違うため、日ごろから学生たちの様子を共有している。

「担任から他の先生に模擬面接を依頼することもあります。男性や女性、話し方や雰囲気などさまざまな相手から面接を受けることで、学生は経験値を上げることができます。実施後は面接した教員と担任が協力し、学生のフォローを行います」（久保田先生）。

「いつもと違う切り口で質問してもらうといいよ」と面接を勧めると、普段接点の少ない他クラスの教員に自分から依頼しに行く積極的な学生もいるという。

「どう見られるか」を意識した面接指導で発信力アップ

「自分のことについてきちんと話せるかどうかを重視しています」と話すのは、就職支援を担当する瀬尾幸江先生だ。担任から依頼を受けると、授業時間外に学生と一対一の対面の場を設ける。

「私が面談や模擬面接を担当するのは選考が進んでいる最中の2年生が中心です。一人につき30分、事前に学生からヒアリングした志望先や面接形式に沿った質問をしますが、志望動機、長所と短所、自己PRはどの学生にも

2年次夏以降に行うビジネスマナー授業の様子。学生たちは社会人としての心構えとあいさつ，敬語，電話応対を学んだ後，「営業」「事務」「接客販売」といった職種別に分かれて専門的な内容を実践・習得する

模擬面接の様子。「『面接カルテ』というA4のワークシートを作成。面接中に気になった点を書き込み，学生の振り返りに役立てています」と瀬尾先生

ビジネス系学科の瀬尾幸江先生。ビジネスマナーの授業や就職面接指導を担当する

必ず聞いています」。

指導を通して、いかに学生の発信力を伸ばすかを考えているという瀬尾先生。

「模擬面接の冒頭で幾つか質問し、学生の反応を見ながらどのように指導するか決めています。時には面談に切り替え、頭の中で考えた内容を言葉にできるよう一緒に考えます。最初から完璧を目指すのではなく、まず自分の気持ちを箇条書きにしてみる。そして相手に伝わる言い回しに整える。小さなステップを積み重ね、回答を組み立てさせます」。

特に学生に意識させているのは、面接での受け答えを通して自身がどう見られているかだ。

「面接官はさまざまな質問をしますが、相手にとって最終目的は、その学生が周囲とどのような関係を築いてきたかを知ることです。そのため、面接官の視点を踏まえた話し方、文章の作り方を指導しています。学生からあまりにもストレートな回答が返ってきたときは一度立ち止まり、さまざまな質問をして内面を掘り下げます。すると、対話の中で『実はこう思っていて……』と学生の気持ちが出てきます。その思いを面接の場に合った表現に整え、学生に提案するのです。違う言い方をするだけで話の雰囲気はずいぶん変わりますから」。

時には延長して相談に乗ることも。「いつの間にか1時間たっていることもあります」と笑う瀬尾先生。指導にかける思いがうかがえる。

「学生の成長を実感したのは、学生が『この前の選考、通りました！』と報告してきてくれたとき。もちろん指導の中で成長する学生もいます。模擬面接を通して自分の足りない点に気付き、『次に面接できる日はいつですか』と自ら求めてくるなど、練習に前向きになる様子が見えるとうれしいものです」（瀬尾先生）。

手厚いサポートのかいあって、多くの学生が2年次の前半に就職活動を終了する。就職活動を通して、学生は自分のことを発信する力を身に付けていくという。

「本校では教員が履歴書を添削していますが、就職活動の前後では学生の文章が見違えるように変わります。最初は苦笑いしてしまうような文章を書いていた学生たちが、説得力のある文章を書けるようになります」（久保田先生）。

授業や学校生活に取り組む姿勢も変わる。

「学生からの質問が漠然とした内容から『この部分をこうしたい。どうすればいいですか』と具体的になります。こちらの提案に対して自分なりに考えた修正案を持ってくるなど、意欲の高まりを感じます」（久保田先生）。

2年生の夏以降は本格的にビジネスマナーの授業が始まる。数カ月後には社会人になることを意識し、基本的なビジネスマナーと事務や営業といった卒業後の職種に特化したビ

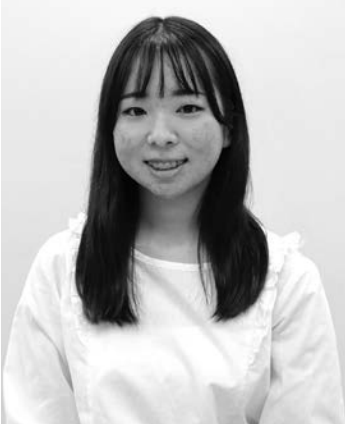
ジネススキルを習得する。学生は電話応対やセールストークの実技試験を経て、即戦力へと成長するのだ。

絶対解のない実務で適切に行動するために

2年次の前期には、秘書検定対策の科目を設けている。就職活動はすでに進行しているため、どちらかといえば就職後に備えたビジネスマナーの事前学習として導入しているものだ。

「秘書検定の学習は、ビジネスの場の疑似体験として役立つと思います。特に事務職はアルバイトで経験するのが難しい職種。秘書検定を学ぶと、世の中や会社でどのようなことが行われているのか、上司とどのようなやりとりをするのかをイメージしやすくなります」（久保田先生）。

「秘書準1級Ⅰ・演習」は、ビジネス系学科を対象とした選択制の科目である。毎年6月に2年生20～40人が秘書検定に挑戦する。いきなり準1級に挑戦する理由について、久保田先生は「記述問題と面接試験を通して、座学の内容を実践に落とし込めるから」と話す。



準1級に合格した経理事務学科2年生の阿部七菜美さん。
「勉強すれば力が付くと分かり，自信が持てました。
今が一番楽しいです！」

面接試験対策では全員分の立ち居振る舞いを撮影し、練習後に学生一人一人と映像を見ながら振り返りを行う。学生は自分の振る舞いを客観的に観察し、現状不足している点や秘書検定で求められる〝感じのよさ〟について学ぶのである。

指導においては正しい言葉遣いの習得に力を入れている。テストで敬語が書けていても、会話となると慣れが必要だ。いわゆるバイト敬語との違いに戸惑う声もあるが、最初は丁寧な言葉遣いで練習するよう指導している。

「学生たちにはより感じのよい、より聞こえのよい、より間違いのない言葉を使ってほしい」と久保田先生は話す。

「秘書検定を学習した学生は語彙が豊かになります。学生の口から『分かりかねます』『さようでございます』という言い回しがすっと出てくるのをみると成長を感じます」（久保田先生）。

経理事務学科経理実務士コース2年生の阿部七菜美さんは、令和4年6月に秘書検定準1級に合格した。

「勉強していて難しかったのは敬語です。特に『お召し上がりになられる』のような過剰な敬語は、今まで間違いに気付かないまま口にしていたため直すのが大変でした。過去問題を解き、間違えた問題は先生に納得がいくまで説明していただきました」。

日常生活で検定の勉強の成果を実感したのは、接客のアルバイトをしているときだという。

「私は地元の野球スタジアムでレジを担当しています。業務中に、お客さまから施設に関する質問を受けることもしばしば。以前は答えが自分の中で分かっていても、接客にふさわしい言葉遣いが分からず考え込んでいました。秘書検定で正しい敬語と接遇用語を学んでからは、滑らかに受け答えができるようになったと感じます」。

晴れやかな笑顔で語る彼女に目標を聞いた。

「すでに就職が決まっていますが、内定先には受付がなく、事務職が来客対応を行います。『受付は会社の顔』といわれますが、私も会社の顔としてお客さまに印象のよい対応をしたいと思います。仕事もプライベートも充実した社会人になれたらうれしいです」。

同校での学びを経て、一回り成長した学生たち。久保田先生が卒業後の彼らに望むことは何だろうか。

「学校の勉強には答えがありますが、実務には答えがありません。秘書検定で身に付けた知識を実務の現場で活用するとき、どのように正確性を導き出していくのか。今までは答え合わせをして、間違いは直し、正解ならそこで終わりでした。これからは、なぜそれが適切なのか説明できることが大事。検定で学んだ考え方を振り返り、活用していってもらいたいです」。